岐蘇林友

大正十一年一月廿五日　第百四十七號　毎月廿五日発行　（明治四十四年六月十四日第三種郵便物認可）

劈頭の辭
◎研究欄
間伐について
南豆地方に於ける樅樹造林に就て
森林勞働者の待遇問題
賢と勞働者の待
◎隨筆欄
木曾と犬
偶感
◎文藝欄
暮ふる頃
或男のノートの斷片
雪の元旦より
◎通信欄
會員消息
廣告
賀狀芳名

劈頭の辭

田中

神秘の霧に鎖された太古の世、原始の人類を誘つて文化、思へば懐しい浮世である。動いたのだ。進展したんだ。

物事は皆動く。太陽は動く。地球は動く。人間が動く。世はすべて動くものである。空からも、土からも微かに、毎日のやうに。

埃を卷いて來る疾風は、ひよつとすると、はたと止む。すると空際にふはふはした綿のやうな雲がむくむく大きくなる。そして暖い陽光のなさけに浴びやうとして立騰つた如くに、ちつと動かなんで居ることもある。丁度何かのサゲッションの様に。それで事實は動いて居るんだ。

此様に發生も變化である。消滅も變化である。進も退も動くのである。

然し此變化も全部ではない。かくて此變動に依つて改惡は現はれる。世の能く動くは奇殆のは必要の法則で恰も我校のやうだ。

さりながら人生は一種の機械作用である。原因から結果まで不可侵の方則にすべて支配せられるか？人間の意志では一指を染むることも出來ない。どんなに華かな企畫や欲求が胸に宿らうと、眞の幸福は完全に果す事も出來ず、永久に棄てられもせない事がある。或は除りに芳ばしくない希望でも其機械の運轉が巧にくるくると豫想が因となつて果を生む折もある　制度も亦然りだ。面白いのは浮世である。

併し智慧の大洋に漂ふと角が立つし、情操の巨流を辿ると流されるし、意地の峻嶽を登ると、なかなか窮屈で、骨が折れるのとで、とかく浮世は住みにくいものである。其處を巧に角も立てず、流されもせなく、除りに窮屈な思もせずに向上轉化を得るのは至難中の至難なのだ。人生は皆此至難の中を彷徨して居るものと思うて差支へない。

なのだ。だから善導を必要とする奇殆だからと云うて動くのを壓へるのは、尚更危險だ一進一退は世の原理である。其中に展開を見る。一旦退いたものの進む

謹賀新年

大正十一年一月元旦

木曾山林學校

校友會

且世は急速度に進展してこの彼岸を目指すのだ。此進運にアダプトして、向上轉化、改新の實を擧げて以て國體の精華に資したいと思ふ。

幸に諸兄諸君の協賛を望むのである。

（年頭の感をそのまゝに）

間伐について

H 生

現今成林撫育の最も重要視されて居るものは間伐施行なり此の間伐の技術たるや極めて經驗を要するものなるは今更言を要せざるも從來兎角弱度に陷りし其の原因は實行者の施行にあたり強度の間伐は被害被り易しとか、直徑大なるものは之を截り惜しむ等何れも何等理由なき感念を以て遂に弱度に陷るものなり。

而して間伐木を撰定に着手せんとせば先づ林想中樣なる部分一、二段歩の標準を設け此處に於て五〇%以上の間伐木を撰定なし全本數並に間伐本數歩合等を精確に調査し常に其の概念を以つて全林を實し當る樣すべきなり尚從來の經驗に徴するに五〇%以上の撰定をなし符號したる時又は伐採直后の樹冠疎間の狀態を見るに極めて過伐なるかの如く見らるゝものなれども此の時適度と見らるゝが如きは是既に弱度に過ぐるものにして此の壯齢林の生長旺盛なる事實に豫想外なる故に樹冠疎間の狀態を永續する如き事毫もなし然るに截り惜しみにより間伐後二三年にして直に次期の間伐を要するが如き林業經營上經費の嵩む憾があるのみならず當底完全なる林想を保つ事能はず又隨つて良材を得べき事不可能なり

次に寺崎博士の幹級別、間伐度合を掲げ敢諸君の御參考までに

林木幹級別

(1)優生木

樹幹を組成する主要木にして其の上層をなすもの

第一級木、一、樹幹の發達隣接木のために妨らるゝことなし

二、懷張偏倚する事なし

（對稱的樹冠を有し且樹冠と樹冠とは平衡するもの）

三、樹冠の形狀完全なるもの

第二級木 一、樹冠の發達隣接木の爲に防げられ其の擴張偏倚するもの

二、樹冠の形狀不整なるもの

a樹冠の發過强にして廣く擴張し其の位置甚だしく上位にありては偏平に發達せるもの

b樹冠の發達過弱にして樹幹甚しく細長なるもの

c樹冠の發達は隣接木の側壓の爲に偏倚するか又は各方面より壓縮せられたるもの

d幹形不整にして甚だしく曲れるもの

e被害木

劣勢木

樹冠の組成に主要ならざる樹木にして其の下層をなすもの

第三級木 生長遲れたるも樹冠は未だ被壓の狀態にあるもの

第四級木 被壓の狀態にあるも尙綠疎を有して生活を持續するもの

第五級木 衰弱瀕死の狀態に在るもの又は倒朴せるもの

此の分類は寺崎渡博士が本邦產主要樹種たるからまつ、あかまつ、すぎ、ひのきに就き觀察の結果に基き1302年の萬國林產試驗場組合會決議及當來獨逸林業試驗組合會決議及瑞西林業組合試驗場規約等を參酌して實驗上の便益及推理上の結果により決定せられたるものなり而して特に第二級木に於て比較的詳細に亘れる類別をなしたるは第二級木が間伐技術上主要なる意義を有すに基づけばなり

1普通間伐

A度 第四級木及第五級木に屬する林木の全部を伐採する場合

B度 第二級木のb及Cの全部第二級木のC及dの大部分第三級木の一部第四級木第五級木の全部を伐採す

但し第三級木のa及bは林冠の配置の狀況によりて之を伐採し又は拔打をなし殘存せしむるものとす

C度 第二級木の全部第三級木の大部分第四級木及第五級木の全部を伐採し尙第一級木にして近き將來に於て他の第一級木に對して生長の障害を爲すべき見込あるものを伐採す

但し伐採後の林採の疎開を永續せしめざる樣注意を要す

2上層間伐

此の間伐は伐期木に對して特別の撫育を爲すを以て目的とす

D度 第二級木及第五級木の全部を伐採し且第一級木にして伐期まで殘存せしむる必要なきものと推定したるもの伐採

但し本間伐は幼林に在りては第二級木及第五級木の全部を第一級木の一部を伐度と同樣の意味に於て伐採し伐期の半頃（d2但しbを伐期とす）より所定の如く實行するものとす

南豆地方に於ける櫻樹造林に就て

世喜家生

茲に南豆と稱するは伊豆半島の先端靜岡縣賀茂郡を謂ふものなり全土面積は六萬町歩にして內山林面積は實に三萬八千町歩全土に對する六割强に及ぶ氣候溫和にして針濶葉樹の生育極めて良好なり天城御料林には杉の美林あり其他公有民有地には常綠濶葉樹等の所謂薪炭林あり同地方の濶葉樹は蘆芽により作業せらるゝもの多く期は普通十二年生內外〃〃して埋跡地は植栽する事なく數回伐採し居るを以て樹種漸次惡木と化し來りしが近來製炭改良と共に雜木林を改良しクヌギ、サクラ、ヤシャ等を植付人工を以て優良樹に更新するに至れり

今同地方に於ける櫻樹造林の大略を記述せんとす

一櫻苗木の養成

イ、櫻の種類

同地方に於けるものは主としてオホシマサクラとす

ロ、一升の粒數 約八千五百粒

ハ、播種の時期

二月下旬より三月下旬迄

ニ、播種量及其の方法

普通一升一畝歩の割合とし列間一尺の筋蒔とす又麥の列間に蒔付くるものあれども其生育は良好ならず

ホ、肥料の種類

人糞尿最も多く施用せられ其他大豆粕等の窒素質肥料を施す

ヘ、一升の成苗數

秋季に至り成績良好なるものは五尺以上に達するも普通四尺內外にして一升より約三千本の成苗を見る

二、山地植付の方法

イ、適地

同地方に於ては至る處植栽に適するも殊に日當り良き地味肥沃なる個所は最も可なり

ロ、植付本數

植付苗木は普通一年生にして一回床替二年生の植付は僅少なり

一段歩普通四百本內外なり

ハ、植付の時期

春植にして發芽前卽ち三月中に植栽を終る

ニ、手入及保護

手入刈拂は植栽后二三回にて可なり

本樹の最も虞る可き被害は兎害なり爲に地上一尺五寸の高さ迄藁を卷き付け樹皮を害されざる樣注意を爲す

三、生育の狀況及伐期

本樹の生育は頗る迅速にして樹齡十年に達せば一尺五寸廻りのものあり伐期は普通十二年內外にして伐採后十二年內外に至れば切口より生育良好なる萌芽四五本の成木を見再び伐採し得らるる可く萌芽力は旺盛なるを以て如斯植栽后四五回は繼續し得るものなり

伐採の時季は萌芽力を損傷せざる時季に於てせざるべからず卽ち既に根部に充分養料を貯へ翌春萌芽の仕度出來たる秋の末より春の初め萌芽前迄とす

四、櫻樹の利用

イ、苗木

オホシマサクラは煙害に强きを以て茨

城縣日立鑛山附近へ年々移出せらるゝもの多し又同地方に於ける補植新植用として養成するも5年々增加するに至れり

ロ、伐採木

薪炭用材として供するの外未だ工藝的用材として利用せらるゝに至らず

ハ、樹葉

三濱村に於ては樹齡三四年生の可成的大なる葉を壇漬として東京小田原名古屋方面へ移出するもの年額一萬圓內外に及ぶ

五、櫻種子一升蒔付に要する費用

種子代	八、〇〇〇円	（一升代）
肥料代	六、〇〇〇	（人糞百二十貫代）
人夫賃	一八、〇〇〇	（播種除草其他人夫十五人分）
計	三二、〇〇〇	

附　植栽用苗木は千木十五圓內外なり

（終）

森林勞働者の特質と勞働者の待遇問題

峽龍生

大戰後社會上種々の問題が著しく論議される樣になり又其一面に於て事實問題となつて現れて居るのは今更贅々を要しないのであるが就中勞働問題の如きは最も重大且難問題として樣はつて居るのは世間一般衆知の事である而して此の勞働問題を森林事業上に於て攻究乃至解決の方法を講ずるの必要は起らぬであらうか今日の本邦一般の森林事業に於ては都市の大工業地或は大鑛山等に於て屢々演出され又現に演出されつゝある樣な紛糾囂々として血の雨を見なければ止まぬ樣な物議の全然無いのは勿論の事極めて些少の爭議をさへ惹き起さずに居るのは眞に林業界の一大幸福として慶す可きである是が理由は一般林業界の經營が勞働者に比較的有福に生活し得らるゝ樣に施行せられて居る反映とも言へよう又今日の林業界の率先者先驅者とも言うべきものが官業及御料林業等であつて其經營上勞働者の雇役方法が他業界の夫れに比して割合に統一され充實されて居る結果とも言へよう又或は現在の森林勞働者が副業的に働いて居る爲に假令多少の固窮があつても彼等に對しては大した苦痛とはならぬ爲とも見る事が出來よう

然し私は是を以て今日森林勞働者は無事平穩だから別に待遇問題など眼中に置く必要は無いと言ふ者があるならば全くの謬見であつて林業家として甚だ面白からぬ事だと思ふのである今日は斯くあつても未來はどう言う成行に變遷して行くかわからぬ只現在の狀態のみに着眼して何も問題も起らずに又誰も彼も滿足して平然としてすまして居たならば其は餘りに現在主義的要解であつて到底百年の大計を遂ぐ可き林業家の方針とは謂へぬのである偏頗的現在主義の到底持續し能はぬ事實は過去幾多の大小の歷史が何よりも最も雄辯に物語つて居るでは無いか

然し私は此森林勞働者の待遇問題を只單に勞働爭議の如き問題の起るの起らないのと言ふ消極的保守的な見解から論ずるのでは無い少しく此森林勞働の內面に立入つて考へて見れば其處に森林勞働としての一種特質の勞働價直を認めなければならぬと同時に此森林勞働價直を尊重し進んでは益々其價直を增大ならしむる爲に其價直の發造者たる勞働者の待遇を改善し優遇しなければならぬのである換言せば森林勞働の特質を認めて森林勞働者を何處までも優遇してやらねばならぬのである

然らば此森林勞働者の所持して居る處の勞働の特殊な性質とはどんなものであろうか凡そ森林事業なるものは主として原產物の造成乃至運出であつて此原產物の產地たるや吾人の居住地農園地等の一小部分を取除いて後に殘つた最も大面積を有し然かも遠隔地であり高山地であり不便極る處の地域で大部の社會人には沒交涉の地である從て交通機關は頗る不備であり非常なる未開な處である爲に其就業する勞働者の作業なり生活は他業界に於て見る事の出來ぬ不自由と苦心とが絕えず彼等の日常に存在して居るのである故に古來より現在又將來も其勞働は人力――其勞働者自身の總ての筋

肉の働き――で作業せられて居るのである即ち今日一般の勞働者の中で隨分肉體的過激な勞働もあろうが概して皆機械力と一所に働き機械と一所に其勞働を休止すると言ふ樣に機械相手の勞働である

然るに森林勞働は中には是等の機械的勞働に接近したものもあるだらうが其九分九厘は凡て自分自身の滿身の節力と膏血とを出して曉日尙明けざる頃から夕薄暗き時まで孜々汲々として働いて居るのである此の樣な優秀な辛抱强き節肉勞働が果して他の勞働界に見る事が出來るであらうか人或は「其は未だ交通が開けず又作業も機械的に發達せぬから今后は時代の進運に連れて凡て機械的勞働に轉化するから人力的勞働は漸次消滅するだろう」と反駁するかも知れぬ、けれども其は餘りに机上の空論であつて恰かも瀘車電車が出來たから歩く人が無くなると言ふ理窟と何等撰ぶ處が無いのである如何に交通なり機械なりが發達增加した處で其勞働は矢張森林勞働としての本質を失はぬものであると私は斷言して憚らないものである成程科學の進歩は時代を追ふて行く以上は如何なる事業と雖も科學的機械的に發達し又施業家の取る可き方針で森林事業も同じく機械的事業に轉化し行くのは當然の事であるけれども其時代を背景として諸種の勞働を比較する時は今日の態樣と少しも變りが無いのである即ち人力的勞働の機械化は一般の傾向で其勞働の本質には何等關係する處が無いのである

斯くの如く森林勞働は肉體的勞働としての最高量を有する特質を有するものであるが其勞働に耐ふる所の身體は餘程の健康のものでなければ到底終業する事は出來無いのである斯樣な事情であるから今日唯單に勞働爭議の起るのの起らないのと晴雨を考ふるが如き姑息的な方策よりは百尺竿頭一步を進めて彼等をして其特殊の勞働價直を遺憾無く發現せしむべく積極的に企圖努力すべきである

尙本問題外なるかも知れぬが今日の森林勞働者は前述の如く社會の最不便な山間陬遠の地域に居住して居るのであるから彼等の精神的向上――人生としての意識し得べき心的生活――を圖つて例令直接に世上文化に接解せずとも尠くとも社會國家上の人格的地位を尊重して遣らねばならぬ事と思ふのである尤も此の勞働者の內面的向上なり人格的地位の向上は唯單に待遇問題其物のみを以て爲し遂ぐる事は出來難き事であるから彼等をして自發的目覺的に發現し得る樣に訓育敎養するの必要がある事を附言して結論とするのである

木曾と犬

HK生

王瀧村の瀧越に地犬が居るらしいと聞いたK君は遂に六日の朝家を出た。

純日本犬は今では滅汰に見られなくなつた。やがて種切れするであらう扨こそ天然物保存會の人々が一生懸命になつて日本犬を探して居るのだ。

K君はY君や日君と一緒に上松から森林鐵道に乘つた。粉の樣な雪がサラ〳〵と降つて寒い日であつた。小い玩具の樣な瀘車に始めて乘つたので妙に好奇心を唆られた。火災を防ぐ爲だといふ不格好な烟突の持主のろ〳〵と木曾川に沿うて走り出す暫時して離れて王瀧川の左岸を進む、特待用客車の眞中には小さな火鉢が赤く燃ねて窓には雪の山、冬の川が次へ次へと寫つて行つたトンネルを二ッ三ッ通り拔けて常磐橋に着くと積で來た鐵材を下ろしそれから機關車に水を入れて又走り出した。橋の邊は木材で川は一杯になつて五六十人の傭が掛聲して働いて居た。

K君の心は淋しかつた。木曾でなければ見られない此光景とそして異樣な情調の爲めに遠い故里の事等を思ひ浮べたのであつた瀘車は仕事の都合で小島迄しか行かなかつたので皆がそこで下りねばならなかつた。川は小島の所で右と左とに分れる川原には松が美しく生ゑ並んでその間に小島の會所がある。平造りの新しい建物茲にN吾が勤めてる。K君は奧の座敷の炬燵に暖たまり羊羹を頰張りやつと元氣づいた。

N君　Y君福島のお正月は面白かつたらう。

Y君　何處へも出なかつたよ、それに風

を引いて寢たし折角の休暇を臺無しにしたよ。

H君　どうだかわからんぞ、何しろ髭がよいから持るんだよ。

N君　折角諸君が寄つてくれても上松や福島と違ひこんな邊鄙な所でお構ひもできんでな。

H君　小島も昨今偉く開けたといふ事を耳にしたよ。ちつと話さんか

會話に花が咲く、そのうちにお給仕がお馳走を運ぶ四君とも恍惚、陶然となる。紅血の躍る若武者の間に交つてはK君も大に若返へらざるを得なかつた。そして蘇門出の人々の間に流れてる、美しい、温かい情操の中に存分に浸つた。外は吹雪が益々荒れるが内からは時々笑聲が漏れる。午后の一時頃にH君は上長へと引き返へす、K君とY君とはN君に見送れて田島を指してテクる。路すがらY君は二子持ローマンスを饒しく物語る。鞍馬橋を右に見て五六丁行くと谷が急に開いて眼界が廣くなる。田島の支局に着いたのは彼れ此れ三時過ぎて明るい小蕭灑りした室にストーブが暖かくY君は支局長その他の誰れ彼れにK君を紹介してくれた。

支局の前には官舍が幾棟かゞ並んでる第○號がY君の住宅でそこへK君が入り込んだ。冬の田島は福島以上に寒く物が皆凍る。寒氣と孤獨とに戰ふY君の根氣には上君も感服しそして疊もよし、設備も申分なし福島なら家賃十五圓といふ所だ獨り者には勿體ない夏はよからうと附け加へた。

翌朝Y君は役所にK君は上島の小學校に行つた。田島は上島より一段低くなつてるので上島の部落は山の中腹に並んでるやうに見える。

流れを見て橋を渡り曲つた坂を上りつめるまでに六七丁もある夏に登山した折泊まつた事もあるので幾らか記憶にもあつたが小學校を探がすには骨を折つた。校長に逢つて瀧越の犬の事を聞いた、校長の話によると郡の命令で去年調査に行つた、瀧越には十二三匹の犬が居るが、皆牡犬計りで牝犬が居らぬ、子犬を隣村から貰らつて育てるのだ、駒ケ根の才兒、岐阜縣の白川等からも來てる瀧越產の犬と言ふものはない、小學校の傍の犬は二子持の產だが寫眞を撮り調査書類と一緒に東京の大學に送つた筈だ瀧越の犬はまだ寫眞にとらない、それ以來調べもせずそのまゝになつてる云々

附、詳細は後日校長が知らせてくださる事にした、猶ほ去年八木氏、與川湯舟澤等にて地犬らしいものを寫したさうな。但しその結果に就ては不明、其他、開田村、木祖村の某所にも地犬らしいのが居るとも聞く、新鄕村の黑川で見た犬は毛色は褐で小柄だが有望だ、耳が立つて尾が左へ卷き上つてる、或日六部がやつて來てその犬の話を聞きとつて行つた、縣から頼まれて見廻つて居るのださうな

K君は瀧越行きを斷念して又Y君の所へ戻つた、都ならば七日までは松の内で人々はお正月氣分に未だ醉うて居る頃だ、山里は一向に物寂しい計り、此夜は空がよく晴れて寒さが激しかつた。上島の舞殿の歌が遲くまで聞こゑて居た、夏の夜若い男女が圓くなつて踊り狂うて居た事を思ひ浮べてK君の顏は曇つた。Y君の居間には裝飾と云ふ程のものは無かつたが着物の色合や諸道具又讀む本等にも若々しい情調に充ちてる氣がした、そしてY君の言うた言葉思ひかへして見た、それは

美は青年の誇り裝飾は權利

といふのであつた。

八日の朝K君は獨りで澤渡峠を越して福島に反へつた、五六日たつてからK君から端書が來た

今朝起きて見たら大雪なので仰天した私は相變らず自給自足主義で炊いては食ひ、洗つては煎て居ます、先づ体の良いオシコミ品の惡い蟄居の形です、夏迄には瀧車が宅のそばに届きませう。前の川では魚が釣れます蚊も居ないし夏はよい所ですよ、夏お出での時には萬事理想的に行く事と思ひます　奥樣にも宜しく

（終り）

偶感

西澤生

春陽新に輝き、茲に大正十一年の新年を

迎ふ。謹んで本會各位の益々向上發展を祈ると同時に、年頭に際し聊か愚なる所感を述ぶ。

吾人は處世上より見て、常に職業の自覺といふ事が大切なことで、即ち吾人は林業に志す者たるを深く考へて居なければならぬ。而かして自己の修養上より古人の傳記なり、先輩の言行錄なり、或は偉人傑士と云はる、人の事蹟を研究して、之を學ぶと云ふ事は何よりの結構な事であるが、往々其の撰擇良しきを得さる爲めに、其の模範とする所を誤まりて飛んでもなき横道に走り遂に一生を誤るの輩も少くないのである されば吏人は互に自己の職業につき沒却せざる樣に注意を拂ふことが肝要ならんと思ふ 亦吾人は職業の上より林業家として世に處する以上は、林業なるもの、國家產業中如何なる位置を占めて居るか、と云ふ事を顧るのも決して無益のことではあるまいと思ふ。即ち森林は國土保安上及び國家經濟上に至大の關係を有する頂目等は誰しも知つて居るも、最一歩進めて其の如何なる点に於て如何なる程度まで國家經濟に影響を有するかを充分に考へなくてはならぬ。思ふに現今の產業中林業の前途遼遠にして亦將來有望たる產業たることは恐らく他に比類尠いので、試みに之れを我國從來の主要なる耕作農業に較ぶるに、農業は歷史の古き丈け隨分發達を遂げしも、近來人口の增殖に伴つて米麥の需要は遙かに其の供給を超へ、既に地方に依りては經濟、消耗の域に近づかんとして居るのである、尤も耕作法、肥料、農具等の改良に依つては尙收獲高を增するに至るも、多くは漸次地方は遞減の域に入らんとしつゝあるなり。然るに林業に於ては今尙斯かる現象を認むることなく、其の歷史が至つて新しい丈けに幼稚にして諸所に未だ手の入らざる荒廢せる林野のみにして、地方は寧ろ遞增の時代に在るものと云ふても可ならんと。故に林業は比較的前途有望にして亦利益大なる事業なれば、經濟上より見て勞費を投ずるも、その個人的としても將又國家的としても最大の利益を收むるものである。勿論素より農業を益々奬勵しなければならぬことを知る と同時に亦林業が殖產興業上有望にして且つ必要なる事業たることを揚言して憚からざる所である。

幸なる哉、會員各位は此の多効有望なる林業關係を有する方々なれば、勿論斯業の爲に努力せられつゝあることは信ずるが尙今後一層奮勵せられることを祈る。而かも林業の經營は他の產業よりも堅忍不拔の精神と千古不易の熱精と、及び一層協同團結の考へが必要である。又利益を收むるまでには永い歲月を要するを以て、餘程意志が堅くなければならぬ。老婆心ながら以上の点より吾々林業家は自己の職業を自覺して國家の爲に益々自重せらんことを望む（完）

霰ふる頃

群雀

今年の四月以來、雜誌部の今井君から、何か面白い一幕物を、と注文であつたが、忙しいのと、物草なのが手傳つて遂手を付けなんだが、再三なので暑中休にと思うて「前期の終」と題して草稿にかゝつたが、上京したので其儘になつて居た。九月になつて亦催促を受けたので「峽谷の寂」とか言ふ樣なことを書き出した。すると十月の記念號發刊運動會となつて、又抛つてしまつた。度々の催促で此冬休にと思ふた。然し正月は遊びたい。それなら暮の中。忙しい氣分で書くには書いたが、讀み返しもしない。注文にゝ適はないらしい。よいか惡いか、てんで分らないが、只今井君の熱心に報いたい心算である

★　★　★

月もいつしか裏山の木立に落ち懸つた上に物の怪の様な黒雲が蔽ひ被さつて、俄に四方が暗くなつた。明暗の別れ目は只一歩の隔りである。

燠き付くやうな晝の暑きは、宵月と共に雲を誘つて夕方近くなるにつれ、S驛を發つてからは滊車が他所には見られない勾配の急な山嶽で、それは恰も二巨人が對立して間を涼しい清い水が其足を洗つて居る溪谷を走るのだ。どの人の顏にも平和の表現が見ゐる。一人の若い男は頽然と痩せ著しく顏骨が高くなつて、角ばつた山の姿を動かしてF驛に着くのを待つて居た。間もなく滊車は徐行した。停車場のどよみを避ける樣にして下車、プラットホームを地下道に出て、驛の口で毎時もながら山間の夜氣に犇と觸れた。すが〳〵しい氣分でだら〳〵阪を下る。町の方から盆踊の聲が聞ゐて來た。歌はそれとも聽き分けられぬが、音色靜に寂闇を破つて彼等の踊る樣が目に浮んで來るのだつた。草の根の喰ぐ虫も聲を呑んで聞惚れて居るかのやう音もない彼等が無我無想に謠ひ連れて、心清く、一脈の音波高く低く、思ひさま〳〵に、滿腔の氣を搾り、若さに誇る魂の叫びの細く長く、咽び泣くかの樣に傳はるのだつた。彼は矢〇橋を急ぎ足に渡つて町へ出た。

踊は見る見る輪が大きになつてゆく其外輪は見物人で通れもしない。彼は今更謠の文句を聽き其節など味はうとはしなかつた。

昔の宿場町も「下に下に」の聲が聞かれなくなつて、雨に雪に風に委せて、荒廢日然太古の民と同じになつて此方、滊車は出來たと云ふもの、平常の娯樂機關が不備だから斯うしたものでも面白く見るより外に樂みはないのだ。彼も時折無聊の苦しさに、一寸とやつて見たこともなかつたではない。言はうなら太古の代の民がやつたと言ふ歌垣その系統を引いた盆踊。未開人ほど集合舞踏を好む者はない。南洋あたりの土人等が何かと云つては人輪を作つて踊り明す。此点から見ると西洋人の夜會のダンスなども同じだ。西洋人は未開の南洋土人から少し進化したものだと彼は解釋してる。

それらの人輪の中を揉まれて歩いて居たがふいと見ると踊み込んで、今 足を踏まれたので痛さにこらへられず、壓えて居る女があつた。髪の恰好といひ、頸筋と云ひ、そして着物の柄も見慣れた物らしい……

「確に……」彼は我知らずに背後へ寄つた暫くすると女は起き上つた。

「やつぱりさうだつた」と言つて

「文ちやんちやないか」

「あゝ幹雄さん」と言つた聲は高かつた。

彼は制止する樣に手を振つて見せた。いつもの學生姿とは變つて、今夜は麥稈帽子に絽織の浴衣の着流しと云ふ打ち解けた彼の身裝を彼女はしげ〳〵と見入つて、常の調子を一段と、物柔かに弛み渡らせて微笑んだ。

「ひとり」

「わゝ、今日叔父さんが見ゐたんです?……のでおつかひに……」

さう言ひながら人目を避ける樣に後ずさりした、幸此町には軒燈きりて、さして明るくもない。

「何に」と彼女の布呂敷包みを見て訊ねた

「お菓子よ……」と言うて目映し相に俯向いた。

「一寸とお待ち一所に行くから……僕も何か買つて行かう……實は踊に氣を取られて忘れて居たものだからね……」と言うて小走りに行つて風月へ寄つた。

「おかみさん此菓子は……」

「へ……お久し振でございますそれは夏菓子でね……形の色々あります通り中に果物の味が入つて居るのですよ」と愛嬌笑をして

「袋にしましやうか」と言ふのだつた。

「はア……それにこちらの最中をね……」と言ひながら布呂敷を袂から出して居たおかみさんは鬚の歪んだのを直して袋に入れて居る。

「賑かですね……」そは〳〵しく云うた。

「今日はね又特別ですよ……一年に一度の樂ですからね……ご見物ですか……」と話しかけるのも彼にはもどかし相にして飛び出した。

「長くかゝつたでしやう……」

「いゝにさうでもなかつたのよ……」と言ひ終ると彼女は歩き出した。入込みをあち

こちと拔けて四辻の所まで來ると○柘の方へ曲つた、彼は盆踊を後に一寸と急いで彼女と並んで橋の袂まで來た。あたりはしんとして夜氣の迫つて來るのを味ひながらお互に話の緒を見付ける樣に俯向いて考へ込んで居た。

文子は或る官吏の眞愛娘であつた、父と言ふ人はどうの昔に死なつた、今は母と文子と妹の繁子の三人暮しである、父の存命中は、すばらしい勢で王町の名官吏の娘として町中の者は父の權威にもひるんで、皆お追從をしたものだつたが、今は昔の思出にさら過ぎない。

文子はよく彼のクラスメイトの評判者だつた、物言ひのあひにデリケートな微笑を湛へるのが彼女の癖であつた、此デリケートが彼のクラスメイをチャームした唯一の力である、そしてフランスのニーチエの小說に出てくると思ふたがあのヒロインの名が文子の綽名になつて居た。

文子の家の隣が水菓子屋で彼等若い學生はよく此杵屋に行つては呑み食ひをした。

近邊の者が井戸端會議の末に

「杵屋の賑はふのは文ちやんのお陰餘も程ある」など羨しさ半分に言ひ言ひしたものだつた。

ふとした事から彼は文子とプライヴエートな附合を始める樣になつた、やさしい手紙の往復が始まつた、二人の中は戀と云つてもよかつたが彼は戀と言ひたくはなかつた確に戀よりはピューアな心の持主だつた。

さうした交際が二年も續いた、友達が飯ごとの樣な戀だと批評したが交情は次第に深味と塡つて行くばかりだつた。

どう〳〵彼は考へると息が詰る樣に覺わて考へ切れなくなつた時はもう戀の頂点に達して居た、それで結婚を申込んだのだつた然るそれは。

遲かつた。

彼と同期生の山本と云ふ男が先に申入れてあつたのだ。

彼の求婚の回答によると「他所からも先口がありますのに、まだ御返事もしてありませんが、それになんぼ良家の御子息でもまだ學生の方にはあげられません」との簡單なものだつた。

これを聽いた彼は、明かに我身の不安と嫉妬とが胸に充ちたことは否定できなかつた仲介人からの戻り路を考へに考へた。二月の末とは云へ、此土地は極寒にも敗けない寒さだつた、寄宿舍の一室に入つた迄は足袋の泥だらけも、途中のこと、冷さなど何もかも更に知らなんだ。

「寒いな……何處へ行つて來た……」と同室の者が聲かけた時始めて「お、……歸つたのか」と深い考への中から呼び覺された。

併しもう不安も嫉妬も何もなかつた、只言ひ知れぬ寂寞を感ぜられるばかりだつた。

それからよく落着いて考へて見ると先方にも道理はある、して自分も卒業間際に迫つて居るので一縷の望は抱かれた。

其後幾日もたゝぬうちに最後のエグザミネーションのタイムテイブルが發表された、クラスメイトは猛烈な勉强振を見せる、遂彼も其雰圍氣の中に引込まれて行つた。

丁度卒業式の日だ、小使部屋で親しい友達と話の花が咲いて隨分際どい所までいつた上げ句に、意外なことを聽かされた、クラスの山本は文子を戀して、もう結婚する決心で彼女も其母親も承諾して居るといふことである。

突きのめされた樣な感じがむら〳〵と湧いて話も何もない、今世の中へスタートを切つた刹那に、生れて始めての懼しい、忌はしい世の悲慘な現實曝露である、悲しかつた。

心臟の血が血管も破れよかしに奔騰するのだ、腹が煮ゐる。

友達に顏を見られるも厭になつた。

ふいと飛び出して裏山へ登つて行く。

「誰か來て呉れ、誰か來て呉れ」と叫んだ突き出た城山の裾は自分を見るべく出て來た樣だ幾千万本とも知らぬ、冬枯たまゝの落葉松の樹は整然として又端然として自分を包んで自分の顏に穴のあく程見て居る、巨大の峭巖が遠くからどんなにするのか、微細に其樣子を見屆けんものと凝視して居る。

何も隱す事が出來ない。

自分の事を悉皆知つてるらしい。

空を眺めた、狹い此谷の上空は紺碧に輝いて居た、太陽は谷の西方に傾きかける、足許の學校のあたりはもう日がかげつて居た樹々は斜に各自長い長い蔭を投げて一つ一つに輝いて立つてる、然かも靜で一枝の搖ぎもない、雪のむら消ゆが点在して居る。黑○川の潺湲の響の上に、未だなか〳〵來ない此谷の春を待ち遠し相な諸鳥の聲が轉がつてゆくのだ。

此密林の中を何もかまはずに、一直線に登出て來た彼は、呼吸の苦しさを感じた、其處の谷の巖角から啜る樣な音を立て、清水が流れ出て居る、神の手に縋る樣に清水を受けて呑んだ。

又登る、此突き出た山の裾の頂に來た。自然は偉大な威力を出して彼を壓へて、言はざるうちに、絶大の言語に充たされてる自分は何を求めに恁んな處に來たのだ、自分の求めたのは人の情である、求め得た人の情は餘りに苦い唐辛の樣な味だつた、これをなるがまゝに委せて、此人情の波濤から永久に免れようとして此處へ來たのだ然し今山の中腹で水を求めた樣に亦此巔で人の情を求めて居る。

生も死もない悠久の自然、咆哮號叫するが如き大音響を持しながら一枝の呟きもない寂闇を保つて居る裕 な造花、清も濁も入れて無關心なもの、其上乘公持平なネオチユアーは人の情を免れんとして來た人間に人情を無理强ひに强ひて止めない、自分の不自然を嘲るもの、樣に。

「どうしたらよいのだ……」とつぶやきながら手を張つて子供の樣に背伸びして見た、向ふの方には、故郷の山々らしいものが雪に埋もれて夕日に輝いて見える。

「あゝ歸りたくなつた……まだ謝恩會はあるが……え、ま、よ……」とすたゝ〳〵下り出した。

彼は午後五時五十九分發の車中の人となつた、M驛を通り越して隧道に入る頃はもう眞闇である。

學校の樣なぞ思ひに浮んで來た、今日の式の事、運動場の事、苗圃や畑の實習事……一年の事、二年事、三年の事……果ては教場の事、車輪のごとんごとんと音のする度に轉換して行く樣に思はれる。……

教師の事になるといろ〳〵の憎惡の感ともつて交つて幻影の樣に。

或る滑稽な教師が殊に目に付く樣に思はれる、それは金縁眼鏡をかけて、如何にも禿頭の工合が滑稽である、S君などあの教師か教壇に立つと、くすくすするのが常であつた、レクチユアーの終つて、折々時間の報鐘の鳴るのを待つ四五分間、皮肉の樣な諷刺を一口二口言ふのに、よく笑はせられた、風の寒い午後である「人生二十歳と云ふ時期はよく誘惑にかゝ易い時期で、嬉しく嬉しくて堪らない、只何を見ても、言つても聞いても、笑はせられる樣な時もあるし、打つて打つて血まみれにされ、突きのめされて伸吟する樣な時もある、恁麼廣莫な大學で、人生は修養を積んで及第してゆくのだ……」

「先生の御經驗ですか」と日君が交せ返すと、一同がどつと笑ふ……カンカンカン

「俺もそれに塡つたんぢやないかしら……」と考へられてならない。

そして彼山本のこと、彼はテニスの選手で運動の花形役者だ、おまけに成績も十位を下らず、俺よりは上だ、それで何でも盲目的にやる、今度もそれた、併しあの突詰めた一途な熱情が實に貴いものに思はれてならない、これが自分を一敗地にまみれさしたものだ……たからやつはり文子も幸福なんだらう……否幸福なのを祈つてる。……

……彼身の上には寂しい、佗しい日が久しく續いた。

「卒業にもなつたし」とて彼の從妹との結婚問題が持ち上つた。親籍の某など

「大裏雛の樣なよい夫婦た」など、褒めそやしたが、彼が何も爲す事もなく、栓を抜いた、ビールよろしくで居るので、皆の者は手を引いてしまつた。

× × ×

「お持ちしませう」と言うた文子の聲に長い長い追憶から呼び覺された、して文子の細い白魚の樣な手から目分の布呂敷包にか、つて居るのを見た。

「有難う」と答へて包みを文子に渡した。

「僕は生れて始めて女と並んで歩いて見たそして文ちやんと二人で歩くなんて、これが最初で、多分最終でしやう……なにしろ……あの頃は初子さんが許嫁の方と夏休みに風致林を傳うて權現の瀧などへ散歩に行くのを見ても羞澁んで居るし、涼みに誘うても母を氣兼して不承ぶきめ込んだらね……」

「ほんとにさうでしたわ……あの時出たくてならないのでしたが……只何どなしに羞しくて」

「そんなことはどうでもよい、あの山本君との話は、いつなんですか?」

「まだ分りませんの……何だか母も氣乘りしない樣ですし……」

「そんなに羞にかまんでもい、ぢやないか……お互の心は決つて居るんだから」

「え、さう言へば、幷んなものですが……妾今になつて恁麼こと言ふと濟まないやうな氣がしますが……(もじもじして)進まないものですから母もね……」

「嘘でしやう……山本君もあの通りの熱烈だし、文ちやんたつてさう厭な譯をなし……あゝ分つた、僕を調弄うんたね……人が惡い……」

「あらそんなことなくつてよ……ほんと」

「幷んな事があつてたまるものか……」

暫く沈默に落ちた。

「いつそ、僕が本君に會つて其運びを急ぐやうに話してみましやう……ね」

「まあ氣の早いお方ね……」

「どうして其方がお互に幸福でしやう」

(彼はそれで自分も安心だといふ考もあつた。

彼等一人は光明の一閃を見出さんと急る如く歩みばかりぼと〳〵と運ぶのである。

其時丁度○福寺の初夜の鐘がゴーンと響いた。

そこの辻を曲つたら、彼女の家だ、互に手中の玉を奪はれる樣な氣がしてならない。

「い、晩ですね……」と切つて付けた樣なことを云ふ。

不意に文子は立ち止つて

「あの……幹雄さん妾を憎いとお思ひでしやうね……」

「なに……僕は一度は嫉妬に焚えもしたか……今になつてそんなことに……然し寂しいとは思うて居るが……ね……」

「それでも同級の方々で遠野さん原口さんなんぞ五月や六月にも見えたのに、あなたはお見えにならんですものの……もしかアノ……なんど考へて……せつなくつて……」

「有難う……其お心は忘れません……」

「あッ……あそこへ來るのは繁子ですわ、見付かるといけません……ご免なさい……」

周章て狼狽めいて兩手で彼の包みを投げるやうに渡して辻を曲つてしまう。

後髪引かれるでうな心持で、彼は引返して本町へ出た 街燈の光で包を見て

「おやつ……周章て、……間違つたな……」と目を丸くする……。

× × ×

十月に入つて間もない霞ふる日、文子の妾が下町に見られなくなつたのであつた(終)

或男のノートの斷片

秋風生

鬱蒼たる針葉樹の林、その間を点綴せる紅葉の色、あくまでも澄み切つた水の流れ、白き河石、惠ぐまれたる木曾の大自然は恰も豊艶なる處女の裝へるが如く今や總ての美を吾人の前に現はして居る。

○

將に山の端に落ちなんとする夕陽が一際明るくこの峽谷を彩るとき黑川のほとりなる寮舎の窓に凭れて物思ひに沈んで居る一人の若者がある。

○

彼は靜かに考へて見た、四月とは云へ谷の春はまだ早く、四方の山々には雪が眞白に積つて、うそ寒い風がしきりに吹いて居る頃、大きな望みと期待とを以て此處へやつて來た、けれ共果して彼が最初期待して來たそのことが幾分なりともむくひられたであらうか、否、却つてそれを裏切られる樣なことが多くはなかつたらうか、かくの如く考へて來た時彼ははるばる此處へやつて來

たことの意味がわからなくなつたたまらなく寂しくなつて來た。

○かくて彼は自分のミリウを見渡した、其處には眞に彼の赤裸になる魂の惱みを語るべき友があつたであらうか、眞に彼の魂の芽を培ひ伸ばして呉れる先輩が一人でもあつたであらうか、遺憾ながら彼は遂に其處にさうした人間を見出すことは出來なかつたさうして人生の孤獨、寂しさ、その感じがひしひしと身に廻るを覺ねた。

○その寂しさは恰も人の顏も人の家も見ることの出來ない荒野の果てに獨りとり殘された時の樣な限りないさびしさであつた、人間の核心を搖り動かすが如き深いさびしさであつた。

○彼はそのさびしさを深くかみしめて味はつて見た、その時黎明の光りのごとく彼の頭にパッとひらめいたものがあつた、それは愛と云ふ言葉であつた

○そこで彼はまた考へた、人間は生れて來ては苦しみ惱み悲しみ喘きつゝ遂には死の國へと落ちてゆく、おゝ人間と云ふものは何と云ふさびしくもまたみじめなものだらう。

○さう考へて來た時彼はキリストの愛、釋迦慈悲、良寛、芭蕉、西行、さうした人々の心がおぼろげながらわかつて來る樣な氣がして來て眼の先きの方に明るいものがチラつく樣に思はれた。

○そこでは大きな聲をして叫んで見たくなつた、人生の究極は愛だ、涙だ、相互扶助だ、むづかしい理窟は抜きにして人間はただそれによつて救はれゝばそれでよいのだ……と。

○誰やらの云つた言葉に「人間は如何に高い教養を受けても人間の本能を脱却することも出來ない、やつぱり人間たるに過ぎない……」と全くさうだ、それに違ひない。無暗に超越顏なんかせずにほんたうに人間らしい惱みに深く徹するところにこそ愛は生れ、生き甲斐は生ずるのだと彼は思つた

雪の元旦より

槇の舍

○廻り終へ廻り初めて日のみこは東し山の端くるくる廻はる。

○初日照る裏山林明みかも御料の檜先づぞ光れる。

○聖かも天際昇る旭子に　波の頂黃金花さく。

○かはたれの暗さのあがる山あひに朝げの煙なびく望は。

○家ぬちに親と子の三人のみ心明るくほゝえみの充つ。

○いささかの雪してさやにことばぎの初日ところとろ菅野の原は。

○さむざむと空のかぎろひ小雪せば笹の葉たゞぬ姿してげり。

○山あひのさ道をひたに行き行けば松風聞ゆ川の音聞ゆ。

○雪ふれば寂しさの湧く會心の激しき光り嬉しさの湧く。

○朦朧と意識に射せる明るみの小窓のすきやとし明けぬらし。

◎廣告

一、募集人員　第一學年約九十名

一、入學資格　高等小學第二學年以上ノ課程ヲ修了シタルモノ

一、入學試驗　高等小學第二學年修了程度ノ國語、算術、及理科ノ試驗ヲ行フ

一、入學試驗ノ場所　木曾山林學校內但西筑摩郡以外ノ志望者ニハ志願者所在ノ郡役所ニテ行フ

一、入學試驗期日　三月廿八日廿九日ノ兩日

一、入學願書〆切　三月廿五日限リ

一、入學試驗入學許可入學式等ノ事柄ハ志願者ヘ一々通知ヲナス

一、詳細ハ御照會ニ依リ入學試驗手續及「入學者のために」入學のすゝめ「又ハ規則書ヲ送附ス志望者ハ至急本校ヘ御照會アリタシ

一、願書ハ至急差出スヲ宜シトス重分御便宜取計フベシ

大正十一年一月　長野縣木曾山林學校

大正十一年一月廿三日印刷
大正十一年一月廿五日發行

長野縣西筑摩郡福島町四〇三番地
編輯兼發行人　安井正夫
長野縣松本市小柳町八五番地
印刷人　淺川吉藏

長野縣松本市小柳町八五番地
印刷所　淺川活版所
長野縣西筑摩郡福島町五八番地
發行所　蘆澤書店

【定價金參錢】

改年に際し學校又は校友會宛賀狀を辱うしたる諸氏の芳名を列記し玆に謝意を表す

安藤前校長　七宮先校長　北村　先生
米山　先生　福山　先生　新家　先生
大塲　先生　松原　先生　沼田前書記
福川　正三　長谷川　毅　佐竹　兵治
松尾　廣次　和田常次郎　日比野　肇
千村　重喜　千村彌之助　大森　悅
市川　豊二　成瀨　義郎　大森　久次
宮下　武夫　宮森太一郎　細江七兵衛
家高　甚一　小松　精內　伊藤正之助
野尻萬次郎　白木　老雄　水上　壯三
中垣　英一　都竹武次郎　宮田　實
久保田傳一郎　宮澤　功　肥田幸一郎
深野　潔　有賀　正一　關谷　靜夫
鈴木〃繁　伊藤　喜代　伊藤　昇次
征矢野余所夫　林　省三　森　巖
大坪　時治　矢島　駒二　近藤　幸吉
小林　秀一　島田勘四郎　吉田　武男
奥村　利一　伊東　厚　川澄　濟次
白井靜一郎　池上　鉚三　上田彌太郎
山村　次一　原　七郎　小羽根安次
山崎　兵平　原　英雄　井上　寛一
柳澤止之進　大石　正恭　小桂　二郎
岡野　直二　羽田　龍尾　霞上正次郎
赤羽　高　荒木　要　和田　實也
千村　善三　曾川　秀雄　原　恒
仲俣　伍市　小林　哲三　遠藤治一郎
松舘藤太郎　加藤　七三　上條　芳郎
北川　春　高村　純平　森戸　吾良
温井　誠一　池田　仲治　古根　勳
熊谷　清逸　野村　光智　竹內房太郎
柳澤　虎三　吉田精一郎　原　正次
不兎　修六　倉田　吉雄　中村　五郎
月田喜代佐　吉田　兵太　岡西　猛
本多清右衛門　原　潔　木下　武夫
田近善右衛門　廣瀨靜之進　小岩井茂樹
矢島　穰　山崎　多門　小藤作四郎
大脇　又衛　川合　清行　標口　勇
山村　克人　山下　勝一　平田久良治
小山田喜十郎　上田　鉚二　横口　勵
百瀨　參一　丸山　久雄　長谷部久雄
小池金三郎　中島　信敏　下平　通雄
八木　愿藏　小幡　弘　藤原　幾喜
松川　久吉　塚田　大　水橋　要作
山本　茂　宮川　永三　丸山嘉市郎
長崎千万一　村松　一郎　大島　晃治
松本　清太　後藤　豊吉　箕部　覺明
福井　利吉　山本　國久　竹村　節三
岡西　萬秋　倉澤　眞　新井喜多雄
村上安太郎　脇田　義正　早川　一雄
宮人　汎省　平田　稻男　坂本光太郎
兒野　榮　木村　榮一　早川　秀雄
峰村　歲末　宮島　岩見　甲田　林
小崎　次郎　小池　常三　草間　勝
大原　猛志　宮崎清太郎　東　原智
擂川　金次　坪倉藤三郎　林　森
原川　只一　中田　基一　小林　元
鷲澤　忠治　青木　重俊　米倉　巧
梶田　實治　內山伊那登　原　治二
長谷川　都　等々力興八　木下　旭
武居喜太郎　數野　二郎　瀧　美雄
久保　照人　松原　松男　宮田　實
柳澤市之丞　簇原　將英　屋加　晴雄
代田文之助　佐藤　誠一　星加　正雄
坂田勘太郎　佐藤　光造　横山　治人
北村竹治郎　石坂　季治　野村　光智
一之瀨袈裟喬　宮城　吉雄　關琴　義
長豆川義雄　唐澤　俊文　水野　宏
倉科浦一郎　三原　忠一　今井　武雄
横井　正守　小松　精內　米久保春雄
宮澤　嘉一　小原　靜雄　高橋　作次
野澤　博　山中三十四　宮森太一郎
岡田彌兵衛　田中　泰吉　伊藤　得衛
原田久保作　阿部　益實　木村鍬次郎
篠原　忠治　丸山　岩吉　成瀨　義郎
市岡　正茂　荻原　惠治　瀨在　實
坂本光太郎　小林桂一郎　鷹見　勳
種倉　隨藏　可兒　敏郎　古根　是
奥原吉右衛門　小崎　高男　中澤　揚
原　貴一　各務　傳六　宇佐見周紫
田中　一　千村　吉雄　中島　要人
長豆川要次　等々力官一　市岡淳一郎
喜多村　明　多田慶次郎　廣瀨　運平
小田　實　黑岩　正平　小林　盛大
原　喜四三　松島　九平　北川　信美
恩田右馬之助　佐藤　一郎　加藤　吉郎
岡田　謙三　內田新之助　今井　欽
中村　豊次　松川　久吉　征矢　朴郎
高峰　傳次　村上　道信　古畑　七三

岐蘇林友

家高碩次　千村万三　藤井鉚
伊保幾太郎　藏田穀郎　平田美則
和田宗吉　原潔　中越三郎
花村隼則　杉本直　杉本貢
金井澄水　野知里慶助　佐々木久一
塚田繁次郎　小藤安親　長崎信一
吉村幸助　筒井正夫　神作四郎
糸魚川良二　澤田富可　吉田精一郎
中岡朝一　松澤莊太郎　木村音次郎
古畑源次郎　原四郎　原詰
富士川金二　小石彌三郎　片桐英雄
今井實太郎　松島長二　渡邊知則
髙柴眞次郎　山下藤一　加藤純一
吉田佐十郎　梅村計介　新田穰
岡山益善　立道乙松　松島周一
加藤清一　吉田正男　前田正義
由尾忠助　近森良材　金田美行
今井眞二　白井惟晨　鹽澤英一
岩久宗治　中田辰雄　喜多村弘
安藤次朗　伊藤善藏　星重男
紺田孝三　齋藤正雄　伊藤芳郎
赤羽三郎　山崎三男　大洞盛一
高木萬平　林與五郎　河島憲一
岡戸郁二　出雲秀一　池主鐵次
鈴木正雄　木村康明　村松一清
坂卷利一　塚本三樹　大澤國男
蜂須賀忠四郎　永井順　吉澤英雄
小林哲三　細窪友一郎　山下常記
野見山定雄　稻葉增吉　山下尙
日野櫻亮　柳澤止之進　水口久

小瀧升太郎　藤枝茂林　曾我義郎
古畑今朝茂　大城朝詮　中村五郎
小縣球次　米山芳郎　椙山節男
野本與一　山下不二三　米山修
長田克巳　仲谷馨　上條嘉一郎
小林右內　長谷部眞一　宮川永三
小林英一郎　宮崎惠喜太　安江銳太郎
中島省三　竹內房太郎　尾重清
深澤佐愛　木下稗藏　吉田良惠
勅使河原角藏　嶽野利雄　丸山久雄
平田實　井上新次郎　小松良輔
安藤晃　小林政基　志津幸祐
森田孝太郎　新井榮太　安藤清吉
須田順吉　清水恒　古畑由太郎
宮澤孝　柳澤宗重　岡島英二
樋田良市　上條高志　代田多見男
林繁市　相吉甲子永　小泉博
加藤和一郎　松島正彦　小野久孝
山岸七之丞　兒玉良八　新村洋
山林孝三郎　今井龍男　伊藤一美
北原隆賴　樋口國治　長瀨稻作
千葉清種　加藤浪男　今井一
桃井武男　田中文正　湯本彌六
片桐藤吉　長谷川史郎　小林眞三
小縣正幸　青山泉　手堀節次
永井武治　古畑豊　小松利三
安信美千雄　原義次　石川熙
福澤龍登　市川正　佐藤鎖守
細江金市　波羅友治　原金一
小松雄二　辻井誠造

◎會員動靜

○小池茂樹君　召集解除舊任地靜岡縣磐田郡佐久間村王子製紙株式會社中部分社へ歸還

○山崎高男君　產業技手拜命廣島縣比婆郡役所勸務

○早川秀雄君　朝鮮平北厚昌郡東興面板暮洞へ轉任

○木下旭君　一年志願兵として新潟縣村松步兵第三拾聯隊第十二中隊へ入隊

○星加晴雄君　竜山步兵第七十九聯隊第十一中隊へ十二月一日より向ふ百二十日間在隊

○紺田孝三君　臺中州竹山郡竹山庄三菱臺灣竹林事務所勞水坑出張所

○廣瀨運平君　一年志願兵として新潟縣新發田步兵第十六聯隊第六中隊へ入隊

○中島省三君　甲府步兵第四十九聯隊第六中隊へ入隊

○長崎信一君　南安曇郡梓村へ除隊歸鄉

○宮下武夫君　松本步兵第五十聯隊第四中隊へ一年志願兵として入隊

○今井忠雄君　埼玉縣秩父町演習林事務所

○丸山嘉市君　長野縣小林區長野保護區

○柳澤處三君　北海道廳開催技手講習生に採用さる住所札幌區北一條東一丁目三番地仁井田耕一方

○大原猛志君　一年志願兵として高知朝倉留守步兵第四十四聯隊第二中隊へ入隊

○木下武夫君　(十五回)北海道札幌區南三條西一丁目福島館內へ